



今年も田植えシーズンが近づいてきました。

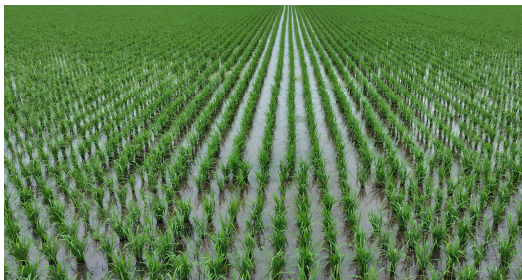
気象庁の予報では、夏の気温は高くなる見込みです。熱中症に注意するとともに、水稻の基本技術を励行し暑さに負けない高品質な米生産を行いましょう。

1. 水稻の高温対策技術（基本技術の励行）

茨城県では水稻の高温対策技術として、高温耐性品種の導入、複数品種による作期分散、病虫害の適期防除とともに基本技術の励行を推奨しています。高温耐性品種であっても猛暑条件では品質低下のリスクが高まりますので、基本技術を励行しましょう。

5月～7月の期間に意識するべき基本技術：

- ① 早めの中干しで茎数を抑える
 - ・ 田植え後 30～40 日を目安に実施
 - ・ 「コシヒカリ」では、茎数が 18 本/株程度になったら開始
 - ・ 中干しは 5～10 日程度を目安に田面に軽く日々が入る程度に
- ② 出穂後は間断かんがいで乳白粒の発生軽減
 - ・ 2 湛 1 落（自然落水→田面が乾く前に入水）で根の活力維持
 - ・ 落水時期は「早生で出穂後 25 日～、中生で出穂後 30 日～



その他の基本技術等、詳しくはこちらから確認できます。



2. 茨城県の試験研究主要成果（R7年度）紹介

樹脂率を低減した水稻「コシヒカリ」向け全量基肥肥料の開発

プラスチックを使用した被覆肥料は、使用後の被膜殻がほ場から海洋に流出することによる環境影響が懸念されています。農業研究所は、尿素被膜殻のプラスチック使用量を約 40% 削減した J コートを含み、近年の出穂期の前進化に適合した窒素溶出パターンを示す新肥料による試験を行い、新肥料は既存の「コシー発かんだ君」と比較して倒伏程度がやや高くなるが同等の収量が得られ、かんだ君の代替肥料として活用できることを明らかにしました。なお、新肥料は「二代目コシー発かんだ君」として令和 7 年度産水稻栽培より県内で市販されています。

畦畔に発生するナガエツルノゲイトウに対する秋冬期の効果的な防除技術

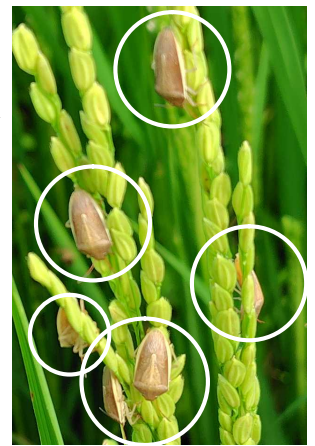
ナガエツルノゲイトウは生態系や農業に悪影響を及ぼすおそれがあり「特定外来生物」に指定されています。2024年の水稲情報 No. 1でもお知らせしたとおり①水路への侵入防止②農地への侵入防止③農地でのまん延防止、をこれまでお伝えしておりました。今回農業研究所は秋冬期(水稲非作付期)の効果的防除方法として、水田畦畔に発生するナガエツルノゲイトウに対し、10月末にグリホサートカリウム塩液剤、または3月上旬にDBN4.5粒剤を処理することで翌春のナガエツルノゲイトウの発生を5月下旬～6月上旬頃まで遅らせることができることを明らかにしました。

また、ナガエツルノゲイトウ対策の情報としては、農研機構が令和7年5月7日に公表した「水田におけるナガエツルノゲイトウ防除マニュアル」があり、インターネット上からダウンロード可能となっています。

イネカメムシの発生動態と被害の品種間差

イネカメムシは成虫の体長が12-13mmの大型の斑点米カメムシで、近年、茨城県をはじめ全国的に発生が増加傾向にあります。斑点米を生じさせる他、不稔となる場合があります減収することから問題になっています。

農業研究所は、イネカメムシの水田内における密度と吸汁加害による不稔および斑点米の被害が、早生品種や晩生品種で多くなる傾向にあることを明らかにしました。特に早生品種や晩生品種の防除は、徹底する必要があると注意を呼び掛けています。



3. 育苗期に発生する病害への対策

(1) 主な病気と原因・症状

育苗期間は、育苗箱周辺の温度や湿度の条件によって、さまざまな病害が発生します。

病気の種類	主な症状	主な発生原因
苗立枯病 (リゾプス菌)	床土の表面が白色のカビで覆われ、やがて灰白色になる。	出芽時の高温 (30℃以上)
苗立枯病 (ピシウム菌)	坪状に発生し、地際部が水浸状に褐変腐敗し、地上部は萎凋・枯死する。	緑化期の低温 (10℃以下)
苗立枯病 (フザリウム菌)	モミを中心に白色～淡赤色のカビが発生する。	緑化期の低温 (10℃以下)
ばか苗病	第一葉鞘、新葉が徒長する。	罹病種子の使用、高温多湿
ムレ苗	日中葉身が針状に巻き、次第に黄褐色に変わり、ひどくなると褐変枯死する。	急激な温度変化 (低温が2～3日続いた後に高温)、多湿
もみ枯細菌病	葉鞘の褐変 (図1)、葉身基部の白化 (図2) などの症状が坪状に発生し、枯死する。芯葉を引っ張るとするっと抜け基部に褐色帯がみられる。	高温 (30℃超) 多湿、汚染土壌、罹病種子の使用

参考：もみ枯細菌病とは

近年発生が増加している病気であり急速に広がりやすく、発病後に有効な農薬はないため、甚大な被害を及ぼす可能性があり、注意が必要です。

予防には、浸種～育苗中の温度管理が特に重要で、浸種は10～15℃、催芽および出芽では28～30℃とし、育苗中のハウス内が30℃以下になるように保ち、多かん水を控えるようにしましょう。薬剤による防除は、種子消毒や播種時に登録農薬を使用して予防します。



図1 葉鞘の褐変（苗腐敗症）



図2 葉身基部の白化

※茨城県農林振興公社イネもみ枯細菌病対策チラシより写真を引用

(2) 主な病気の防除対策

病気は、発生を未然に防ぐことが最も重要です。

適切な温度、水管理で発病しにくい環境を整えるとともに、各病気に予防効果のある農薬を使用しましょう。緑化期を過ぎると散布可能な薬剤が限られるため、対策は早めに行いましょう。

発病してしまった場合、農薬散布以外には、本田に移植することで病気が改善する場合があります。被害程度が大きい場合、播き直しやJAなどから苗の購入を検討しましょう。

4. 水稻の初期管理のポイント ～除草剤の使い方と分けつ促進～

(1) 除草剤を使用するときの注意点

水稻の初中期除草剤の効果を十分に発現させるには、水管理を適正に行うことが重要です。除草剤散布後、1週間程度は掛け流しや落水をしないようにしましょう。

田面が露出すると、除草剤の効果が低下し、雑草が繁茂してしまいます(図3)。田面が露出しそうなときは、あふれ出ないように注意して静かに入水し、水深を確保しましょう。



図3 初中期除草剤施用後、田面が露出 → 田面が露出した部分で雑草が繁茂

(2) 分けつ開始後は、浅水管理に

(除草剤の効果を十分に発現させた後は、) 初期生育の分けつを促進するために、浅水管理(2～3 cm 程度)にしましょう(図4)。

特に、天候が不順で、分けつが不良の場合は、浅水管理で地温を高め、茎数を確保しましょう。



図4 分けつ促進のための浅水管理

(3) 置き苗は早めに廃棄しましょう

置き苗はいもち病の発生源になります。田植え後は、すみやかに水田外へ除去しましょう。

- 1 2026年4月8日現在の登録内容です。
- 2 資料の作成に当たっては、農薬使用基準の内容について細心の注意をはらっていますが、農薬を使用する方は、必ず、使用する前にはラベルを見て、対象作物、希釈倍数や使用量、使用時期、使用回数等を確認し、農薬の誤った使用を行わないようにしてください。
- 3 また、農薬の新しい安全性評価の導入等にもない、直ちに使用方法を変更するよう注意喚起される場合があります。その場合は、ラベルの使用方法ではなく、変更後の使用方法に従って使用してください。最新の情報は、農薬の購入先や茨城県病害虫防除所のホームページ等で確認してください。

【農作業安全】 農作業中の熱中症に注意しましょう！！

夏季は暑い日が続き、熱中症に注意が必要となります。熱中症は適切な対策をすることで防ぐことができます。お互いに声を掛け合い、予防しましょう。

作業の前に

- ・ 天気（気温、湿度等）を確認しましょう
- ・ 体調不良時（睡眠不足、飲酒状況）は熱中症になる危険が高まります。無理をしないようにしましょう。
- ・ 特に梅雨明けごろまでは、身体がまだ暑さに慣れていない中で急に高温多湿な天候に変化するため、熱中症になる危険が高くなります。

農林水産省が熱中症対策のチラシをホームページ上で公開しておりますので、詳しい対策等はそちらをご覧ください。



農林水産省 HP「農作業における熱中症等対策研修資料（簡易版）」